

愛で変えられないか、海！

申豊国際学院 陳淵（中国）

なぜだろうか。人はいつも海に対して特別な思いを抱いている。一生に一度でいいから海を見たいと願ってやまない人や、海を自分の母として愛している人、一生を海に捧げる人もいる。

私の故郷は中国陝西省の田舎町で海のない所だったので、海への憧れは人一倍強かった。自分で選ぶ服はいつも海の柄で、夜はスピーカーから流れる波の音を聞きながら海を想像して寝たものだ。青く透き通った海に白く輝く砂浜、どこまでも続く水平線。私にとって海はファンタジーの世界だった。

そして12歳の夏、ついに小学校の卒業祝いとして、両親が青島の海に連れて行ってくれることになった。私たちは日の出の時間に合わせて海に向かった。太陽が海から昇る。海が青ではなく、金色に染まっていく。本当に天国に来たと思った。はだしでゆつくりと砂浜を歩いた。砂はざらざらしている。暖かい海水が私の足を包む。手で海の水をすくって飲んでみた。「しょっぱい！」と思わず声が出ると同時に私の目に映ったものは、ペットボトルやビニール袋などのゴミや死んだ魚だった。海のファンタジーの世界が音を立てて崩れていくようだった。ホテルに戻った後、下痢をしてしまった。海水を飲んだせいかもしれない。

当時12歳だった私は、ただ海に対して失望するだけで、何もすることができなかった。その後は中学に上がり、勉強が忙しくなったこともあり、海への思いもだんだん消えていったように思う。高校

卒業後、来日し、今は日本語学校で勉強している。ある日の授業でSDGsについて知り、興味を持った私は、帰宅後自分なりに調べてみることにした。まず目に入ったのは「山陽女子中学校・高等学校地歴部のSDGs活動」の記事だった。彼女たちは、瀬戸内海における海洋汚染にいち早く着目し、地元漁師と協働して海ゴミの回収・分析を実践するだけでなく、海ゴミ問題の解決に向けて、回収と併せて、ゴミの発生量を減少させるために、海ゴミ問題の啓蒙活動を行っているということだった。記事を読みながら、私は12歳の時に見た青島の海を思い出していた。

中国の学校では、机の上の勉強が最優先され、課外活動はあまり重視されていない。日本では学生が気軽に社会貢献に参加できる環境にあることをとてもうれしく思った。このことを日本語学校の先生に話すと、実際に海のボランティア活動に参加してみたらと勧められた。私は早速ネットからボランティアに申し込み、伊豆海岸の環境保護活動に参加した。海を見るのは12歳の時以来だった。いろんな思いで胸がいっぱいになった。2019年7月15日、その日は奇しくも海の日だった。

私が参加した活動の主な内容はゴミや資源の分別だった。てっきり海のゴミを拾うものだと思っていた私はびっくりした。海岸の出口にテントを張って、ビン、缶、燃えるゴミを捨てるのを手伝いながら、環境保護意識を向上させることを目的とした活動だった。海にゴミをポイ捨てる人の大半は観光客だ。観光客は、まあいいかという軽い気持ちでゴミを捨ててしまうが、そこに住んでいる人はちよつとした行動できれいな海を失うことを知っている。

活動を通して仲良くなった大学生がこんな話をしてくれた。

「私はね、生まれ育った所が海に近かったので、海が大好きなんですよ。海の香りに癒やされます。そして海って悲しいときもうれしいときも何か心に感じるものがあるんです。一体何か分からないけれど、海を見ると安心するんです。だから海を守りたいんです」

その後、ずっと彼の言葉が私の頭の中でぐるぐると回っていた。彼の海に対する特別な思いは、きっと愛なんだろう。私は海のない所で生まれ育ったが、不思議と彼の気持ちがよく理解できた。私も「海を守りたい!」と心から願っている。

伊豆海岸の環境保護活動をしたことをきかっけに私は海のゴミ問題について深く考えるようになった。「ゴミをポイ捨てる人がいて、そのゴミを拾う人がいる」このような構図のままでは社会はいつまでたっても変わらない。海のゴミ問題の本質は私たちが「海を守りたい」と心から願うことではないだろうか。その思いは、きつと一人一人の行動を変えるはずだから。

地球は表面の70%を海で覆われている。今年の夏に私が活動に参加した伊豆の海は、12歳の時に生まれて初めて見たあの青島の海とつながっている。私が小さい頃から抱いた海へのファンタジー。大人になった今、未来の子どもたちにもファンタジーを抱くことができるきれいな海を残してあげたいと心から願っている。

